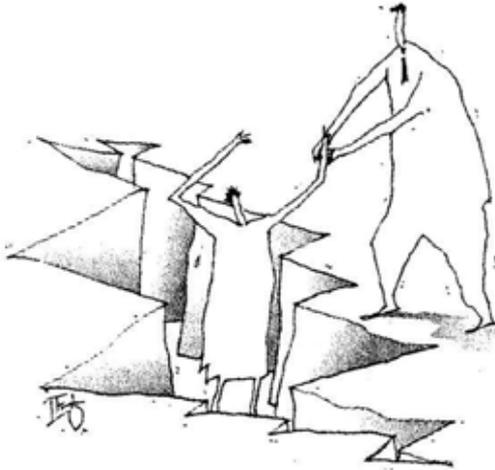


# 主人と召使い

## 第3編7章

キリスト者の生活のすべては「自己否定」という言葉一つで要約される。



キリストを新しい主人として仰ぐ私たちはすでに私たち自身の主人ではありません。私たちのすべてのものを完全にみなキリストに従わせる必要があります。ですから、私たちは私たちの意志と欲望はもちろんのこと心配や恐れまでもみな忘れる必要があるのです。そしてこれからの私たちのすべての人生は新しい主人に仕える召使いとして生きて行くようになるのです。

ある資産家の家が突然に破産してしまいました。そのため、その家の主人と家族は無一文になってしまったのです。自分たちが持っていた素晴らしい家屋敷、豊かな財産のすべてをみな失ってしまったのです。しかし、そのすべてを買い取った新しい主人は心が海のように広い人物でした。どこにも行くところがないその家族をたいへんに憐れに思ったのです。そこで新しい主人はそのすべてのものをその家族にそのまま任せることにしたのです。「この家のすべての物をあなたにおまかせしますから、必ず自分の持ち物だったときのようによく管理してください」。新しい主人のお陰で昔の主人は新しい主人に対する感謝の心ですべてのものを熱心に管理し始めたのです。

私の主人は私自身ではありません。完全に破産してサタンに奪われていた私たちを、キリストが買い戻してくださったのです。このようにキリストが新しい主人となってくださったのです。そして今、私に与えられているもののすべては新しい主人からいただいたものなのです。そしてこの私の主人は私ではないという事実は私の新しい人生の出発点となり、人生の案内人となってくれるのです。

第1節 私の主人は私ではなく神である。

自分は主人か召使いかという立場の違いは大変重要な問題です。自分の立場が何であるかに従ってその考えも、言葉使いも、行動も全く違って来るからです。ですから私たちがキリスト者としてどのように生きなければならないかと言う問題を考えるときに、まず最初に確認すべきこと

はこの主人と召使いの問題、つまりその立場の問題なのです。そして聖書は私たちの立場を神の「僕」と言っています。この言葉は単純ですが、明確に私たちの立場を言い表しているものです。

さらに聖書が私たちに新しい人生の出発点で覚えるべき事柄として与えてくださっているみ言葉は「自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい」と言うものです（ローマ 12:1）。そのために私たちは「この世に倣わずに、むしろ、心を新たにして自分を変えていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかをわきまえるようになりなさい」と勧められています（ローマ 12:2）。私たちはもはや自分自身のものではありません（コリント第一 6:19）。神が私たちの主人となってくくださったために、私の理性や意志が私たちの計画と行動を支配するようにしたり、私たち自身のために生きるようになってはならないのです。神だけが私たちに支配してくださるよう、そして神のために生きなければならないのです（ローマ 14:8、コリント第一 6:19）。

キリスト者の生活の第一歩は自分のすべての力を尽くして神に仕えることができるように自分自身から完全に遠ざかることから始まります。神に仕えるということは単に神のみ言葉に従順である言う意味だけではなく、自分のすべての肉体的な考えを捨てて、清い心をもって聖霊の命ずるところに完全に従っていくと言うことなのです（エフェソ 4:23）。これこそが私たちが命に入ることのできる門となるのです。哲学者たちはその真理を知らなかったために理性の声に従えと主張しましたが、キリスト教哲学は理性を聖霊に従わせるように命令します。私たちの理性が聖霊に降参して、自分の立場を譲り、服従するとき、私たちは私たちの内に生きておられ、私たちに支配して下さっているキリストの声に従うことができるようにされるのです（ガラテヤ 2:20）。

キリストを新しい主人として仰ぐ私たちはすでに私たち自身の主人ではありません。ですから、私たちのすべてのものを完全にみなキリストに従わせる必要があります。そのため、私たちは私たちの意志と欲望はもちろんのこと心配や恐れまでもみな忘れる必要があるのです。そしてこれからの私たちのすべての人生は新しい主人に仕える召使いとして生きて行くようになるのです。私たちの人生に対するすべての主権をその新しい主人にお任せし、どのようなことでも、どのような状況でもその方を仰ぎ見て、つねに彼に最善を尽くして仕えようとするのが私たちが歩んでいこうとする新しい人生の出発点となるのです（マタイ 16:24）。

私たちが一端、このような自己否定で私たちの心を占領させるとき、すべての罪人に例外なく見いだすことができる罪から遠ざかることができます（テモテ第二 3:2-5）。徹底した自己否定で武装しない人間は次の二つの種類の罪人に属しています。一つは溢れて出る欲望を抱いて罪を犯す者たちです。そしてもう一つは外側から見ると善を行っているようであっても、その内側では自分への賞賛と自尊心を満足させるために、また自分の利益のために善を行おうとする者たちです。人の魂の内には無数の罪が隠れていて、昔からの言葉にあるように人間はどうにもならない罪人であるからです（マタイ 6:2,5,16,21:31）。

このように自己否定はイエスの弟子となる道への第一歩です。自分は自分を支配して下さるキリストの召使いでしかないと認めるのです。私たち自身を忠実な召使いとしてその新しい主人に服従させるとき、私たちは私たちの人生の旅路をよく歩むことができるようになるのです。そして思慮深く、正しく、信心深い人生を送ることができるのです（テトス 2:11-14）。しかしもし私たちが徹底して召使いとなるうとしていないならば私たちはいつでも不敬虔と世に対する欲望に捕えられてしまう危険があります（ヨハネ第一 2:16；エフェソ 2:3；ペトロ第二 2:18；ガラテ

第2節 私たちは私たちの主人の御心通りに隣人を愛し仕えるべきです。

私たちが自分を完全に否定してキリストを新しい主人として仕えると言う出来事は私たちのすべての人生を支配して、その人生のすみずみまで影響を及ぼすことになります。大きく見れば、私たちの人生は十戒の二つの部分に分けることが可能です。一つは他の人間との関係であり、もう一つは神との関係となります。そして私たち自身を否定することは、一部は他の人間との関係に影響を与え、残されたそれよりもさらに重要な部分は神との関係を新しくさせるのです。まず、他の人間に対する私たちの態度と生き方がどのように変わるかを調べて見ましょう。

最初に私たちが否定しなければならない私たちの本性について調べて見ましょう。私たち人間の本性は盲目的に自分自身を熱心に愛そうとします。そして他人はすべて自分より愚かな者たちと見なします。神様から受けた小さな賜物一つのために私たちの心は風船のようにふくらんでいます。そして自分を誇ろうとする思いで破裂しそうになっているのです。自分の罪はひた隠しにして、自分の失敗には寛大となり、さらにはそれを正当化して誤魔化そうとするのです。

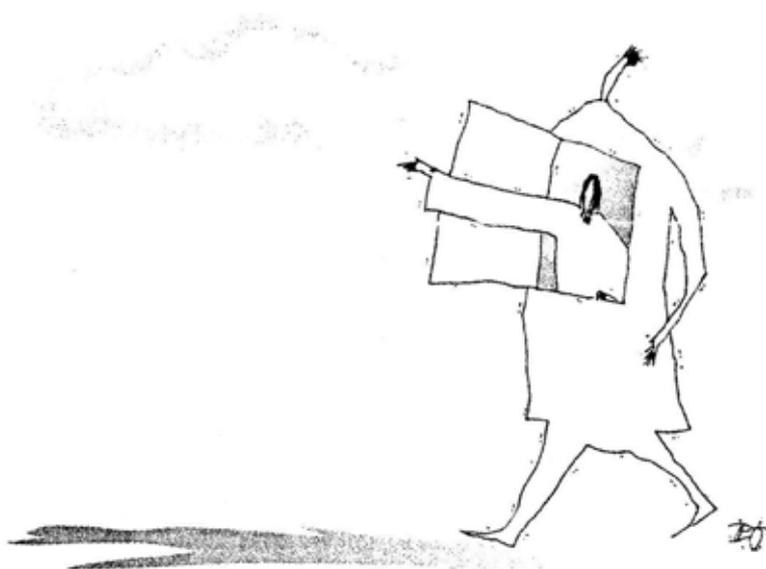
しかし、他人の失敗を激しく非難して、さらに悪く誇張して、他人が少しでも自分より優れた善行を行ったときにはそれにけちをつけるために全身全霊を尽くします。まるで自分はただの人間ではないとでも言うように他の人を皆自分より下に見下して、自分をすべての人の中で特別に優れた者と思っているのです。貧しい人が富める人に、無知な者が知恵ある者に、下級の者が上級の者に自己の主張を譲歩するときでさえも、自分が彼らよりさらに優れていると思う心を抱いていない者は一人もいないのです。

このようにすべての罪人はみな自分が優れていると考え、その心の内に自分の王国を持っています。気分よく互いに意見も合って、すべての事柄がうまくいくときは柔和で明るい人たちも、ひとたび困難に出会い、互いに意見を衝突し合うようになると毒を吐くようになるのです。環境と条件の変化に関係なくいつも謙遜な態度を維持することが出来る人がこの世にどれだけ存在するのでしょうか。そのように闘争心と利己心は人間が忘れていた最も恐ろしい伝染病なのです。

私たちはすべて自分が罪人であり、すべての善と能力はただ神から与えられるものと信じているならば(コリント第一 4:7) 他の人が間違いを犯したときにもそのことで騒ぎ立てることは好ましくありませんし、良いことをしたときにはその栄光と義を神にお返しすべきなのです。そしていくつかの欠点があったとしても私たちが尊敬しなければならない人たちをそのことゆえに非難したり、攻撃してはならないのです。そのために私たちはいつも自分の不足と過ちを思い起こし、謙遜な心を回復させて、それを保ち続け、さらに強化させていかなければならないのです。謙遜こそ真の親切を実践することができる唯一の道だからです。

聖書は私たちに厳しい言葉を語っています。人に利益を与えるために私たちは自分を犠牲にして、自分の利益を求めてはならないと言います(コリント第一 13:4, 5) いったいそのようなことが本当に私たちに可能でしょうか。しかし、聖書はそうしなさいと私たちに勧めているのです。そして私たちをその水準に至らせるために私たちが受けたすべての恵みはみな一定の条件の下に委託されたものであると警告しているのです。その条件とは何でしょうか。私たちが受けたすべての恵みはただ教会の益のために使われなければならないということです(ペトロ第一 4:10)

私たちの身体のことを考えてみましょう。私たちの身体の肢体は最優先に、そして最善を尽く



して他の肢体のために仕えます。そのようにしてこそ自分の健康を維持することもできるのです。それは自然の法則と言えます。私たちも教会で同じであると語られています（コリント第一 12:22-27）。ですから私たち信徒は自分の持っている才能がどのようなものであれ、それを用いて他の教会員のために奉仕しなければなりませんし、教会の健全な成長のために全身全霊を尽くすこと以外で自分の才能を使ってはならないのです。自己否定はそのような態度を持つために必要なことであり、それは自分が身体を構成する一つの肢体であること、他の人たちに仕えるように主人のものを委託されている管理人であると言うことを認めることなのです。

しかし、私たちは他の人のために生きようとしてもたびたび落胆してしまうことがあります。それは私の助けと好意を受け取った人たちが示す態度のためにです。このようなことは軽視すべきことではなく、時には深刻です。しかしそれは私たちが主人を仰ぎ見ないで、人を見てしまうために起こります。私たちが他の人に善を行う一番最大の理由は神にあるのです。その人たちの内に神様の形が刻み込まれているために私たちはその人たちを愛し、彼らに仕えなければならないのです。キリストがその人たちのために血を流されたのですから彼らを尊敬しなければならないのです。私たちの目には資格がないように見え、恵みを知らない人たちのように見えても、神がその人たちを価値がある者で見なしておられるのですから決して私たちの善行を中断してはならないのです（ガラテヤ 6:9,10；マタイ 6:14,18:35；ルカ 17:3）。

このように自己否定と人に仕える愛の実践とは互いに密接な関係を持っています。自分をそのようにしなければならない召使いと認めていない場合、人を助けることも自分の満足を満たすものとなってしまいます。人に自分がお金や時間をほんの少し分け与えるとまるで自分がそれらの持ち主のように振る舞い、さらに自分が救ってあげたその人たちの主人であるかのような態度を取りやすくなるためです。ですから人を助けるとき私たちは徹底して召使いの立場に立ち、失望せず、傲慢にもならず、自分を誇るべきことがないようにしなければならないのです。

第3節 私たちは私たちの主人であるキリストを愛して仕えるべきです。

今度は自己否定のもっと重要な部分を取り上げます。それは神との関係についての部分です。

この事実については私は既に何回も繰り返して語って来ているのでそれ以上説明することはありません。しかし、明らかなことは私たちがこの世で平安を得て、正しく生きようとするならば、私たち自身と私たちが持っているすべてのものをすべて主人にお任せして、私たちは召使いの立場に留まり、その立場を守り続ける必要があるのです。

私たちの本能はみな同じです。財産と名誉と権力を手にして、豪華で贅沢な生活をしたいと言う欲望はいつも狂った獣のように私たちの内で暴れ回る機会をねらっています。そして貧しくみすばらしい人たちの立場を驚くほど恐れ憎んでいます。そのために私たちは一方では野心と貪欲の頂上に到達しようと苦闘しています。もう一方では貧困と悲惨さを避けようとして悲しい努力を続けているのです。

敬虔な人たちがこのような落とし穴に陥ることがないようにする道はただ一つです。それはただ主から与えられる祝福だけをいただくことと決心し、それ以外のどのような方法で成功することも繁栄することを望まないことです。神を主人として仰ぎ見て生きるのです。神に対して自分を否定すると言うことは、神だけを仰ぎ見て、神の御心に忠実に献身するということです。

神を仰ぎ見て生きる私たちにも思い通りにならないときもあり、また思い通りになるときもあります。世の人々はすべてのことを運命のせいにして、その運命は盲目だと言います。しかし私たちの運命は慈しみ深く公正な神の御手によって治められているのです。神は私たちに良きことも悪しきことも最も公正で適切に配置されて、最後には私たちのためにそのすべてを祝福としてくださいます。ですから私たちは病気や戦争、貧しさや、さまざまな災難に被られたときにも義しく慈しみに満ちた父なる神を仰ぎ見て、その方を待ち望むのです（詩編 131:1,2）。それらの災いから解放されたときには感謝を神に捧げます。そのように生きることが真にただしい方法なのです。

#### 結びの言葉

すべての不幸は召使いが主人になろうとするところから起こります。私たちはキリストを主人とする召使いです。徹底的な自己否定は召使いの幸福を知る第一歩です。そして召使いはただ主人だけを仰ぎ見て生きるのです。私たちのすべての幸福はその主人にかかっているからです。今あなたの主人は誰でしょうか。